

せん そう
もう戦争はない

丸川栄子・作／梶 鮎太・絵



著 者 紹 介



まる かわ えい こ
丸 川 栄 子

1926年、神戸市に生まれる。
兵庫県立第二神戸高女をへて
県立第一神戸高女高等科国文
科卒業。平塚武二氏に指導を
受ける。著書に、短編「あひ
る」「セミ」「おまもりふだ」な
どがある。神戸児童文学あす
の会同人。日本児童文学者協
会会員。

現住所 〒653兵庫県神戸市長田区
前原町1丁目200



かじ あゆ た
梶 鮎 太

1927年、広島県に生まれる。
1951年、武蔵野美術大学油絵
科卒業。長いあいだ高等学校
の教師をしたのち、新聞、雑
誌やテレビなどのさしえの仕
事に従事する。おもな作品に、
『子どものための伝記図書館』
(三一書房)『孤島ひとりぼっち』
(国土社)、新聞連載「ふしぎ
なアラン」(徳島新聞)などが
ある。

現住所 〒164東京都中野区東中野1-33-8

913

丸 川 栄 子

もう戦争はない

国土社 1971
142P 21cm (新選創作児童文学 18)

基本カード記載例

©新選創作児童文学18 **もう戦争はない** 定価 600円 《検印廃止》

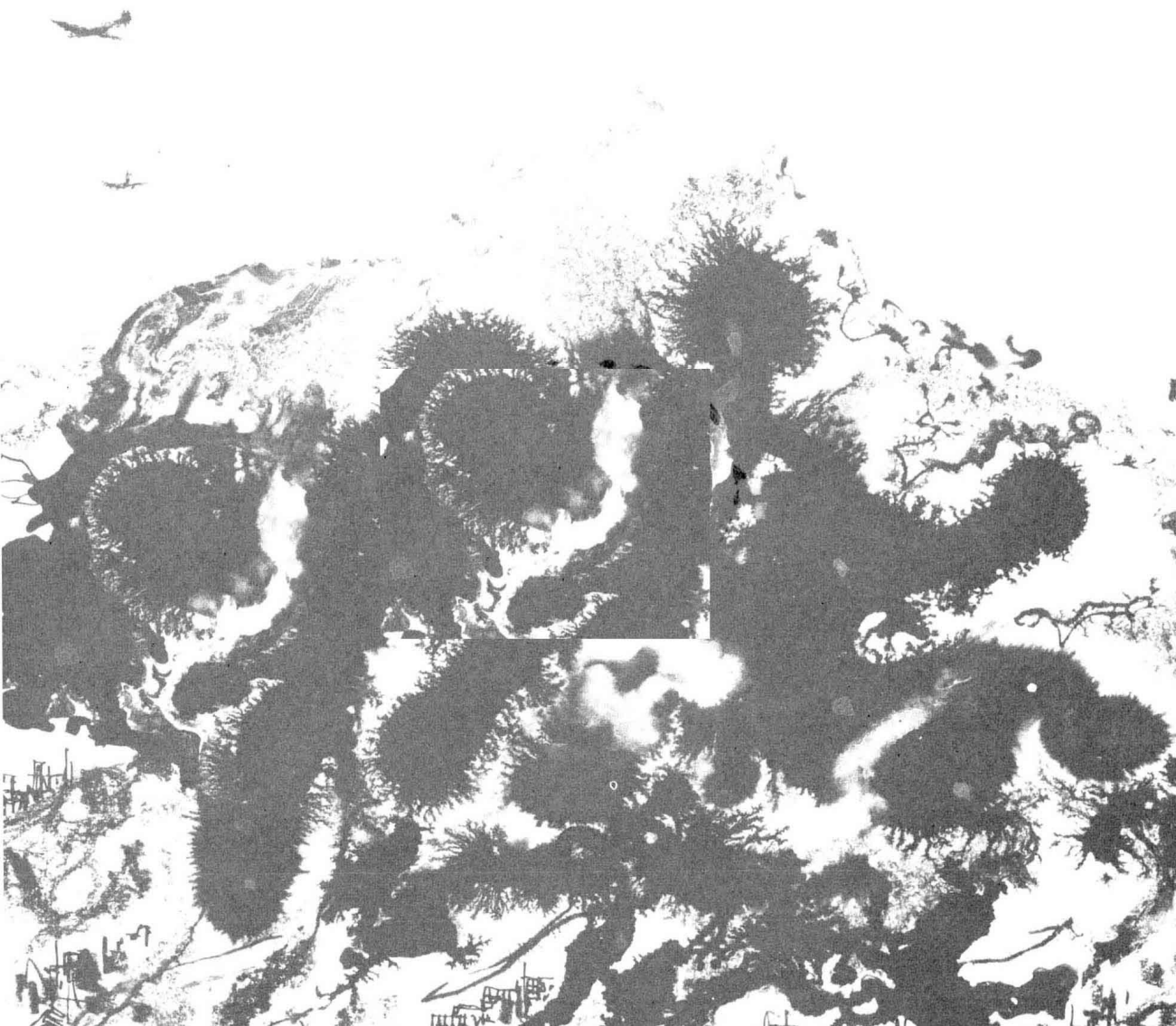
初版印刷 1971年3月15日 初版発行 1971年4月5日 印刷 株式会社厚徳社

*著者 丸川 栄子 *発行者 長宗泰造 *発行所 株式会社国土社
東京都文京区目白台1-17-6 〒112 電話 (943) 3721(代) 振替 東京 90631

乱丁・落丁はおとりかえます

せん そう
もう戦争はない

丸川栄子・作／梶 鮎太・絵



●もくじ

とびこんできたクマ 4

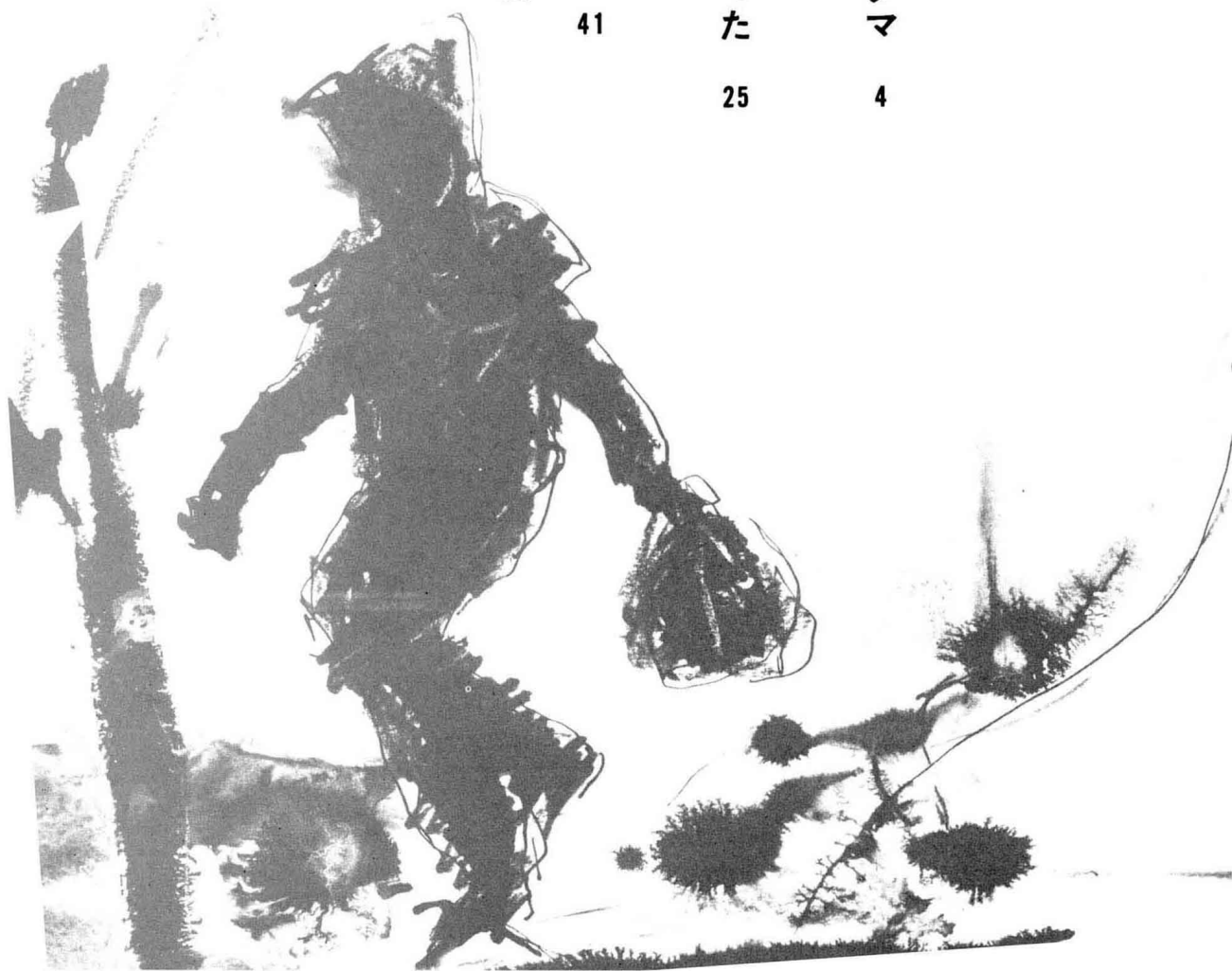
空襲 10

焼けなくてよかった 25

汽車の切符 34

きゆうくつな旅 41

仁左衛門さん 52



どろぼう猫 どろぼうねこ 63

吾一 ごいち じいさん 72

クマさんおみごと! 81

クマのおよめさん 88

お国のため…… 102

おとうさんは…… 113

クマの赤ちゃん 121

もう戦争 せんそう はない 127

あとがき 140



とびこんできたクマ

ジーッ、門のベルがすこしなった。

「あら、だれかしら？」

わたしは、かけていって、内^{うち}がわから、

「どなたです？」

とたずねた。返事^{へんじ}がない。かんぬきをはずして、細目^{ほそめ}に戸をあけてみると、石だたみの上に、手のひらほどのまっ黒い子猫^{こねこ}が、ちょこんとすわっていた。

「まあ、かわいい！」

わたしは、とびだして、子猫^{こねこ}をだきあげた。子猫^{こねこ}は、丸^{まる}い金色の目でわたしを見あげて、ミャアとないた。

「悦子^{えつこ}、どなた？」

おかあさんの声がした。わたしは、子猫^{こねこ}をかかえたまま、部屋^{へや}の中へとびこんだ。



「ちょっと見て！」

わたしは、おかあさんのひざの上に、子猫をポトンとおいた。

「だめ！ よごれるじゃないの」

おかあさんは、ひざにひろげたぬいかけのわたしのモンペの上から、あわてて子猫をどけた。

わたしは、子猫をすくいあげると、胸にだいてつやつやしたまっ黒な背をなでた。子猫は、目を細くして、うたうようにのどをならしはじめた。

「飼ってもいいでしょ」

わたしは、おかさんの顔をぬすみ見しながらいった。

「だめよ」

おかあさんは、そくざにことわった。それから、ちょっと声をやさしくして、

「いくらたのんだって、だめ……」

と、つけくわえた。

今年になって、食糧事情が急に悪くなっている。

主食、一人一日分の配給量は、二合三勺（約三三〇グラム）ときまっていたが、全部をお米で配給されることは、なかった。とうもろこしや、こうりゃんや、豆かすなどがまぜられ、いもや豆が、お米がわりに配給された。

副食や調味料も、全部配給なのだが、それもほんのすこししかない。

どこの家でも、庭を畑にし、道の両側にまで土もりをして、野菜をつくり、とりしまりの目をぬすんで、いなかへ買出しにいった。

近所の犬や猫が急にすがたを消したと思ったら、警察にひきとられたり、犬と
りや猫とりに、つかまったりしたのだそうだ。

「警察につれていった犬や猫はね、毛皮が兵隊さんの帽子や手袋になるんだって……。かわいそうねえ」

どこかできいてきた妹のゆかりが、声をひそめるようにしていていた。

わたしも、

「やみで売ってる牛肉は、犬や猫の肉だそうよ」

と、はなしているのを、きいたことがある。

こんなときだ。猫を飼うというほうがむりなのは、わたしにもわかってる。

「情がうつらないうちに、すてていらっしやい。かわいそうだけど」

と、おかあさんが、いった。

でも、そうしたら、この子猫は、すぐ死んでしまうだろう。

安心したように目をとじてのどをならしている子猫をだいたまま、わたしが立ちつくしていると、

「ただいま！」

元氣な声がして、妹^{いもうと}のゆかりが帰^{かえ}ってきた。汗^{あせ}とほこりのにおいをさせながら、部屋^{へや}の中へとびこんできたゆかりは、

「あら！　かわいいわア」

ときけんで、わたしの胸^{むね}から子猫^{こねこ}をもぎとった。

「どこでひろったの？」

「ひろってきたんじゃないの。ベルをならしてたずねてきたの」

「へえ！」

ゆかりは、うれしそうに目を輝^{かがや}かせた。

「あんたたちの猫^{ねこ}ずきを知ってる人が、すてていったんですよ」

よこからおかあさんがいった。

「名前はなんてつける？」

ゆかりは、はしゃいだ声をわたしにむけた。

「そうね」

わたしは、よこ目でチラッとおかあさんをうかがった。

「だめよ悦子^{えっこ}。さっさとすてていらっしやい」

おかあさんの声がきびしかったので、わたしは、思わずゆかりの腕^{うで}の中から、



子猫をとろうとした。

「いやよオ！」

ゆかりは、くると背をむけた。

「ネズミに石ケンかじられたときも、にんじんや、じゃがいもかじられたときも、猫がいればいいのにと、いったのはだれ？ ネズミがたくさんいてこまってるのに、どうしてこの猫ちゃんすてるの？」

「そうよそうよ。ネズミにかじられること考えたら、猫を飼うほうがとくよ」と、わたしもいった。

「ね、いいでしょ。ね、ね、こんなにかわいいのに。すてたら、この猫死んじゃうのよ。かわいそうよ。おかあちゃんは、そんな意地悪じゃないわね」

ゆかりは、いっぽうの手に子猫をだき、もういっぽうの手で、おかあさんの肩をゆさぶった。

おかあさんは、こまったような顔をして肩ごしにゆかりの顔を見、それからわたしの顔を見た。目がわらっていた。わたしは、（しめた！）と、思った。

「こうさんしたわ。そのかわり、ふたりで世話をするのよ。おかあさんは、責任を持ちませんからね」

まっていたことばだ。

「バンザイ」

ゆかりは、子猫をさしあげた。子猫はびっくりしてゆかりの手にしがみつ き、赤い口をあけて、ミャア、ミャアないた。

こうして、子猫は、家で飼われることになった。

まっ黒で、胸のところにか所白い毛のあるのが、ちょうど月の輪グマのようなので、名前はクマとつけた。

クマはメス猫だった。

昭和十九年六月のある午後のできごとである。わたしは、女学校三年生（いまの中学校三年生）のゆかりは、小学校五年生だった。

空

襲

太平洋戦争は、日ましにはげしくなっていた。

若い男の人たちは、戦場へ送られ、増産をいそがなければならぬ工場は、人手不足になった。そのため、学生たちも、学校で勉強することを中止し、工場へ

はたらきにいった。

わたしの学校が、電気工場へ、はたらきにいきはじめたのは、クマがきて、一か月ほどすぎたころのことだ。わたしたちは、そこで、爆撃機や戦闘機につけるメーターをつくった。

空襲がはげしくなりそうだというので、大都市の小学生たちの疎開がはじまった。

いなかのしんせきへあずけられるのが、えんこ疎開。先生がつきそって、農山村の寺や、旅館にとまり、友だちといっしょにくらすのが、集団疎開とよばれた。わたしの家は、いなかにしんせきがないので、ゆかりも、集団疎開の仲間入りにすることになった。いきさは、鳥取県の三朝という温泉町で、出発は、十月末ときまった。

三朝は寒いところだという。おかあさんは、ゆかりのために、綿入れのはんてんをつくったり、下着をぬったりするのにいそがしかった。わたしも、古毛糸でソックスをあんだ。毛糸が弱いので、つまさきとかかとに、もめん糸をあみこんだ。

でも、ゆかりは、修学旅行にでもいくような気分で、リュックサックやカバンの中へ、荷物を入れたり出したりしてはしゃいでいた。

ところが、あと一週間^{しゅうかん}で出発^{しゅつぱつ}という日、ゆかりは、とつぜん高い熱^{ねつ}をだした。病氣^{びょうき}は急性肺炎^{きゅうせいはいえん}だった。

薬^{くすり}も、栄養^{えいよう}になる食物^{しょくもつ}も、自由^{じゆう}に手にはいらなときだから、命^{いのち}が助^{たす}かったのが、不思議^{ふしぎ}なくらいだった。でも、いちおう峠^{とうげ}をこえても、はかばかしくなかった。

そのあいだに、友だちはみな疎開^{そかい}してしまい、ゆかりひとりが、とり残^{のこ}された。ゆかりは、毎日^{まいにち}、クマを相手^{あいて}にして、ふとんの中で遊^{あそ}んだ。そのさびしそうなすがたを見て、

「あのとき、クマをすてなくてよかったわ」
とおかあさんは、わたしにいった。

そのころには、クマはもういちにんまえの猫^{ねこ}になっていた。丸^{まる}い金色の目は、キラキラ輝^{かがや}き、まっ黒な毛は、ビロードのようにつやつやしていた。

「クマにうろうろされると、やみのさかなでも買^かっていると思われそうだわ」
とおかあさんはこぼした。クマが、太^{ふと}って美^{うつく}しいのが、氣にかかってしかたないらしい。

「ネズミをたべるから、栄養^{えいよう}がいいのよ」
とわたしはこたえた。



クマは、ほんとうによくネズミをとった。

わたしが工場こうじょうへでかけるとき、クマは、いつもへいの上にすわって、ミャーオン、ミャーオンなきながら見送みおくってくれる。

ところが、ある朝、わたしが家を出ると、クマがついてきた。

「クマ、帰かえりなさい」

「電車でんしゃでいくのよ。まいごになるよ」

つかまえようとすると、するりとにげる。おいかけると、屋根やねへのぼってしまふ。わたしは、あきらめてそのままいそいだ。

クマは、うれしそうに、わたしのまえになりあとになり、ピョンピョンはねるようにしてついてきたが、家から二百メートルほど南の、橋はしのたもとまでくると、柳やなぎの木の下に、ちょこんとすわった。そして、橋はしをわたっていくわたしを、なきながら見送みおくってくれた。

つぎの日から、橋はしのたもとまでわたしを送おくってくるのが、クマの日課にっかになった。ゆかりは、病氣びょうきがよくなりしだい、友だちが疎開そかいしている三朝みささへいくはずだったが、その年の暮くれがきても元氣にならなかった。

おとうさんは、家が空襲くうしゅうされて焼やけたときのことを考え、ゆかりを疎開そかいさせる場所ばしょを、さがしまわった。でも、病氣びょうきの子どもをあずかってくれるような家は、

なかなか見つからない。おとうさんは、亡くなつたおじいさんの古い友だちで、後藤さんという人が、美吉町といういなか町に住んでいることを思いだし、手紙をかけた。ほとんどあてにしていなかったのに、後藤さんから、二月はじめ、「おこしください」と、返事があつた。

わたしたちは、大よろこびで、とりあえず、トラック一台に、あれやこれや荷物をつみこんで、おくりとどけた。

そのころ、大都市は、つぎつぎ空襲をうけていた。神戸も、毎日のように、空襲警報になり、敵機が爆弾を落とした。でも、そのころの空襲は、敵機の数もすくなく、目標も、工場とか、軍事施設がほとんどだった。

だが、三月十日、B 29の大編隊が、東京を焼夷弾攻撃したというニュースがつたえられた。くわしい発表はなかったが、たいへんな被害らしいといううわさは、またたくまに、神戸へもつたわつてきた。

その翌よく日の十二日は名古屋。十四日は大阪が、B 29の焼夷弾攻撃をうけた。十五日の朝、工場に出勤してみると、部屋のすみに人がぎができていた。わたしは、日の丸のてぬぐいで、はちまきをしながらのぞきこんだ。まん中で、吉田さんがしゃべっている。

「きのうの、大阪の空襲のはなしよ。おばさんが、焼けだされて逃げてきたんだ